

浄土教に於ける菩提心の研究

「法然上人の菩提心観について」

原 聖 晃

法然上人によつて開かれた浄土宗は、人間救済について独自のとも思われる性質を有し、その信条、教義は當時日本仏教界に於ける大革命であり、又既成仏教教団に對する一大啓蒙であつたと考えられる。

宗祖の宗教的信念は、選択集に余すなく述べられているが、その要綱は聖捨帰浄、捨難帰正、称名選取の三重の択法取捨であり、その精神は衆生救済を第一の目的とする仏の本願の開顯にある。

浄土門に於ける一切の行業は選択本願念仏に帰結されるものとされ、念仏による生活の統一をその目標として、凡入報土、浄土往生を目指すものである。

而してその当時の仏道修行者が行つていた所の持戒、菩提心、解第一義、読誦大乘等の行為を聖道自力の行として撰択集の各所に明らかに廃捨の意を示されているの

であつて、特に菩提心については、有上小利にして念仏の正行に併う余行にすぎないとされている。

菩提心とは仏果菩提を求める心であり、仏道の根本基調となるもので、多くの経論に説かれており、天台、真言、華嚴、三論、法相等の諸宗に於ては、それぞれ宗義の基本としているのであり、このような聖道諸宗の重んずる菩提心を宗祖が廃捨されたことは、当時仏教界に大きな動搖を与えたのであり、特に高弁上人の摧邪論の如きは、この廃菩提心の説にその論旨を集中しており、浄土教義に痛烈な論難を加えて來たのである。

明恵の主張は、要するに菩提心は一切仏教の根本であるから浄土往生にもこれを正因としなければならぬとしているのであつて、その論難は別にしても、宗祖の浄土教義が如何に漸新的であり、他宗にとつては到底容認されない教法であつたかが知られるのである。

而して法然上人は浄土教を伝承する祖師が菩提心を勧めておられるのに対して痛烈な批判をされているのである。即ち、

浄土の人師おほしといへども、みな菩提心をすゝめて
觀察を正となす。ただ善導一師のみ菩提心なくして、

觀察をもて称名の助業と判ず。当世の人善導の意によ
らずば、たやすく往生をうべからず云々（法全五三六）

これによると宗祖は善導一師のみ菩提心なくして、凡夫
が報土に入る道を確立されたと見られたのであるが、善
導には觀經疎玄義分、法事讃下、往生礼讃等に菩提心の
語があり、発菩提心を勧めておられるのである。しかし、
選掎集第十二章に天台、真言等諸宗の菩提心をあげて、
次に、

又有善導所釈菩提心其如疎述。發菩提心其言雖一各隨
其宗其義不同。然則菩提心之一句広互諸經編該顯密意
氣博遠詮測冲邈。願生行者莫執一遮萬。諸求往生之人
各須發自宗菩提心（淨全六ノ五六）

と述べられている所より、浄土宗に於て菩提心を全く否
定されたとは考えられないのであつて、善導所釈の菩提
心を以て浄土の菩提心と認められたと考えられるのであ
る。

これについて逆修說法にも同様の意味が述べられてお
り、即ち

但導師意欲自先浄土満足菩薩大悲願行而後還入生死遍
度衆生即以此心名菩提心也

亦同じく

浄土宗菩提心者先往生浄土欲度一切衆生斷一切煩惱悟
一切法門証無上菩提之心也

と説明されているのをみても、浄土の菩提心を善導に於
ける往相還相の菩提心を浄土の菩提心として認められ
たと考えられる。

更に御法語の中にも種々述べられているのであるが、
三部經釈の中には

菩提心は諸宗をのをの其意へ同じからず、浄土宗の
意は浄土に生まれんとねがふを菩提心といふ

とある。この浄土に生れんと願う心こそ、浄土宗に於け
る三心であり、最も重要なものと云わなければならない
のである。

以上の如き遺文を見ることによつて、宗祖の菩提心觀

を知ることが出来るのであるが、浄土宗に於て三心は欠一不生の安心であり、宗祖の三心釈をみるに、その釈は大体に於て、往相廻向によつて示されているのである。

このことは善導の意を受けつがれたものと思われ、それは我々凡夫が浄土に往生した後に得られる道とされたのであり、往相の中に於て還相の摂化があるわけである。

宗祖に於ては選択本願念仏の一行によつて凡夫が浄土に往生することを、衆生解脱の唯一の道と確信され、それが一切衆生の救われる道、即ち願往生の念仏によつて、我々はすべてをそこに求めるのである。此処に於て宗祖の念仏往生の信念は確立せられ、すべての難行も廃されたと考えなければならない。即ち宗祖に於ては普く一切衆生と共に往生を願することこそ利他度生の菩提心とされたのであり、浄土宗の菩提心は念仏往生を願する中に含まれているのである。

而して選択本願念仏とは、これら菩提心を摂化した所の本願念仏であり、その勸化は機根に従つて万人を包容する所の広大な慈悲心と云わねばならないのである。し

かしこのような宗祖の菩提心に関する考え方は、宗祖滅後の教學上に於て、大きな問題を残したのである。それは浄土宗に於ては既に善導に菩提心があり、宗祖が聖道自力の菩提心をあげてこれを廃され、一方浄土の菩提心を認めて、その菩提心についてくわしく論じられていない所にあつたのである。また先述の「浄土にむまれんとねがふ」の文等は三心との關係に於て、安心上に於ける疑義を残したものと思われ、この菩提心の問題は、明悪の論難にみられる如く、更に深く考察されなければならないのである。

而してその門流は浄土宗の教義を組織する上に菩提心について種々の見解を出し、疑義に対する釈明を行うと共に積極的に祖述と顕彰を試みていつたのである。